

<前回>近代聖書学と歴史的精神**(1) 近代と歴史的精神**

1. 自然主義と歴史主義

近代的知の二つの動向(因果律の二つのタイプ)

作用連関と意味連関の組み合わせの諸パターン。

→ 自然科学/精神科学、説明/理解

2. 「近代」と人間的現実の歴史化

現実は無常不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。

↓

近代歴史学、歴史的視点

4. 「歴史主義」の多義性あるいは混乱

5. 存在レベルにおける歴史・歴史化(存在論的概念)

・人間存在の歴史性

・聖書的な歴史的思惟(聖書の宗教が歴史的思惟であるという意味)

聖書的人格主義とギリシヤ的存在論、動的歴史的と静的形而上学的、といった対比。

・近代化が歴史化であるという意味での歴史

↓

歴史・歴史化とはどのレベルにおけるいかなる現象・事態を意味しているのか。

6. 知・人間的現実の地平としての歴史

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

cf. 自然法

7. 争点: ニヒリズムそして倫理学

8. H・R・ニーバー『啓示の意味』

(2) 近代聖書学とその諸前提

1. 知・人間的現実の地平としての歴史(歴史化)→歴史主義・歴史的思惟

2. 近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想(研究)=近代聖書学の成立

近代世界(近代的な日常性)へのキリスト教の適応という歴史的動向において。

・18世紀「新しい解釈学をめぐる対決」(シュトゥールマッハー)

「プロテスタントが自分の土台の力を信頼して、この対決を回避しなかったことは、全体としてプロテスタントが誇ってよいことである。」(181)

3. 近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学

言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など

4. トレルチ

「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」

「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的出来事に生ずる連関がそれである。」(10)

「蓋然性の判断」(10)

「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」(11)

「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」(12)

5. パネンベルク

方法論的現在中心主義=歴史的思惟の解釈学的構造

制度的再帰性における歴史学・歴史研究

7. ドイツ古典的哲学の宗教論

0. 近代キリスト教の偉大な思想運動

イギリスの理神論とドイツ古典的哲学の宗教論

1. 信仰論：信仰義認、客観性、主体性、合理性

教義・命題の理解・承認

主体的内的な経験

単なる理性の限界内

2. Paul Tillich, *Dynamics of Faith* (1957, MW4, pp.231-240)

The term "ultimate concern " unites the subjective and the objective side of the act of faith --- the *fides qua creditur* (the faith through which one believes) and the *fides quae creditur* (the faith which is believed). (236)

cf. sacramentum : ex opere operato (事効論) / ex opere operantis (人効論)

+

超自然主義／自然主義

自然 (因果性) / 歴史 (意味)

3. 古典的議論

(1) 「宗教 (信仰) とは、蓋然的な知識・認識の問題である」、「真の宗教は合理的な神概念を前提にすべきである」 → 宗教は認識である。

(2) 「宗教は倫理的実践の問題である」、「信仰は意志の決断の事柄である」 → 宗教は決断である。

(3) 「宗教は感情あるいは情動の問題である」、「信仰は絶対的依存感情である」、「信仰は主観的な気分の問題である」 → 宗教は感情である。

(1) 波多野精一からカントへ

0. 近代以降の思想状況 (啓蒙主義、近代科学、宗教批判、世俗化) において、宗教はなにも哲学的思索の対象であり得るか。宗教と近代的合理性との関係という問い。

1. 波多野精一宗教哲学：『宗教哲学』(1935年)、『宗教哲学序論』(1940年)、『時と永遠』(1943年)の三部作における宗教哲学体系。

2. 講演「宗教哲学の本質及其根本問題」(1920年)：波多野宗教哲学のプログラム。

・20世紀における宗教哲学の構築は、カントの批判哲学に依拠することによって可能になるとの確信(「正しき宗教哲学」)。波多野はドイツ留学時代にドイツ哲学界の主流であった新カント学派のカント解釈に依拠しつつも、カント自身の哲学に帰ることによって自らのカント解釈の確立を試みている。問われているのは、新カント派のカントではなく、カント自体。

・合理主義は、神を直接の理論的な認識対象とする哲学、その意味で、神の学である。伝統的な自然神学はこのカントの批判哲学により批判されることによって近代以降の知的状況においてその妥当性を失った、神の存在論証は論証ではなく人間における宗教的問いの表現である。

・宗教的体験とその積極的な意義を理解可能にするために、カントの批判哲学から実在論(高次の実在論)を構築するという課題。現代の思想的諸文脈で批判的実在論として模索されている理論構築に連なる試み。

・正しき宗教哲学は、神自体を理論論証の対象とする哲学ではなく、人間の事柄としての宗教、人間的生における宗教の可能性と現実性を論じる哲学。

(2) カントと宗教哲学

3. カントはこの新しい宗教哲学を徹底した仕方で遂行したわけではなく、波多野宗教哲学は、ヴィンデルバントの「カントを理解することは彼を超越すること」という言葉の通り、カント批判哲学の宗教哲学における徹底化を目指している。

「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異って、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」(同書、280頁)。

4. カント批判哲学：形式的理想主義と反主知主義。

・人間の精神的諸活動についてその「事実問題ではなく権利問題」を問うということ、つまり、「その理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究する」と先に述べた批判主義の精神にほかならない。

・理論理性を超えて「普遍妥当なる価値」を認めうるすべての領域を含むこと。「理性とはあらゆる種類の普遍妥当的価値の全体の謂い」(同書、282頁)だからである。理論理性に理性を限定する主知主義(合理主義)に対して、宗教にも理性を根底にもった固有の価値を認めることが、正しき宗教哲学を可能にする哲学的根拠とされる。

5. 波多野宗教哲学：ルターとカント

「宗教的体験の理論的回顧その反省的自己理解」と定式化された宗教哲学。

6. カント哲学がキリスト教思想に対してどのような位置を占めるかは、研究者によって大きく意見が別れる。カント哲学研究の分裂・分節状況。

・『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』『たんなる理性の限界内の宗教』(宗教論)のいずれを解釈の基点とするか。あるいは全体としてのカント。

7. 「神こそが全カント哲学の真の唯一の根源であるというように言うこともできるのではないだろうか。言いかえれば、全カント哲学を宗教哲学という視点から把えることもけつして不当ではないのではないだろうか」(量、16-17)。

アルベルト・シュヴァイツァーあるいは、ハイデッガー、ピヒト (Georg Picht, *Kants Religionsphilosophie*, Klett-Cotta, 1985.) のカント論。

(3) カントとキリスト教神学

カントと聖書：宗教論(たんなる理性の限界内の宗教)が基本的なテキストとなる。

8. 「第一編 悪の原理が善の原理とならび住むことについて、あるいは人間本性のうちなる根元悪について」。カントはたんなる楽観主義的な啓蒙的な近代主義者・理神論者ではない。

・「根元悪」：人間は生来悪である(悪の性癖(Hang))。

その起源は? 「理性起源はあくまでも究めがたい」(57)

cf. 「アダムにおいてすべての人が罪を犯した」「時間的はじまりに関して見た悪の説明」

・人間の「根源的素質」は「善への素質(Anlage)なのである」。

↓

聖書的人間理解の伝統、神話的語り

神の像/墮罪(原罪)

9. 道德律の意識は「理性の事実」であり、この事実性は善の理念の実践的な実在性を示している。しかし、道德律による確証に加えて、その範例・例示をカントは認めている。

・イエス=道德的な理想としての一個の人格 → 道德的主体としての自覚をもってイエスを模倣する。福音書読解の意義。

・神の国と教会=イエス・キリストに合致しようとする人間の集団としての道德的共同体
道德哲学な見地から見た教会の純粋な理想像

(4) ヘーゲルと歴史という問い

1. 人間的現実としての歴史とその多義性

存在論的構造/伝統・思考方法/時代動向

人間存在の歴史性(すべての文化圏・民族は歴史を有する)。

キリスト教は歴史的思惟を特徴とする(ほかの伝統との対比)。

近代化は歴史化である。

2. 西欧近代と歴史主義

近代化は歴史化である。 → 歴史相対主義へ

価値や制度などが歴史の文脈で形成されたということの意識・自覚。

自然主義と歴史主義という対をなす思考形態成立(トレルチ『著作集9、10』ヨルダン社)。

3. ティリッヒ「われわれの時代の根本問題としての歴史」(1939) (『著作集 8』白水社)
「この問いの統一が歴史のなかの一時代に性格を与える」、「その歴史的状况がもっている根本的問い」、「何がわれわれの時代の問題そのものであるのかというすべてを包括する問い」

「この問いに対する私の答えは、それは歴史である」、「それはわれわれの歴史的事実である」(218-219)。

4. ヘーゲル：絶対精神の自己実現と英雄。理性の狡知。→ 歴史における宗教

「歴史的人物、世界史的個人とは、このような普遍をその目的の中に蔵しているような人々」(『歴史哲学 上』岩波文庫、96)、「これらの個人は、その目的の中に理念一般に関する意識をもっていたのではなかった。彼らは実践人であり、政治家であった。しかし同時に、彼らは時代の要求と時代の趨勢とについての洞察をもつ思想家であった」(97)、「情熱の特殊な関心と普遍的なものの実現とは不可分のものである」、「特殊なものは、互いに闘争して、一方が没落しつつ行くものにほかならない。対立と闘争に巻きこまれ、危険にさらされるのは普遍的理念念ではない。普遍的理念は侵されることなく、害われることなく、闘争の背後にチャンと控えている。そしてこの理性が情熱を勝手に働かせながら、その際に損害を蒙り、痛手を受けるのは[理性ではなくて]この情熱によって作り出されるものそのものだということを、われわれは理性の狡知 (List der Vernunft) と呼ぶ」(101)。「神が世界を統治するのであって、その神の統治の内容、神の計画の遂行が世界史である。そうして哲学は、この計画をつかもうとする。というのは、この計画に基づいて実現されたもののみが現実性をもつのであり、それに外れたものは単に腐った実存 (faule Existenz) にすぎないからである」(107)。

5. ヘーゲル哲学の魅力あるいは意義

- ・歴史意識に合致した包括的な論理体系 (一貫性と包括性)
- ・伝統を統合し歴史を説明する能力、多産性

6. 三位一体論的哲学

「ヘーゲルは神学に、少なくともプロテスタント神学に、三一論を課題として返還した。合理主義においても感情神学においても、三一論は広く忘れられてしまっていた。しかるに三一論にとってのヘーゲルの意義は、神学へのこの影響のうちにあるのではなく、その意義は、彼が三一性を同時に哲学的課題として開陳した——三一性哲学を意図したという点にある」(イエシュケ、118)。

7. 三位一体論は、19世紀のキリスト教神学 (自由主義神学) においてよりも、むしろヘーゲル哲学において保持された。

→ ヘーゲル哲学のキリスト教思想としての意義。

<参考文献>

1. カント『たんなる理性の限界内の宗教』(全集 19) 岩波書店。
2. 量義治『宗教哲学としてのカント哲学』勁草書房。
3. 永見潔『カント哲学とキリスト教』近代文藝社。
4. 佐藤全弘『カント歴史哲学の研究』晃洋書房。
5. ヘッフェ『インマヌエル・カント』法政大学出版局。
6. A・シュヴァイツァー『カントの宗教哲学』(著作集 15 巻 16 巻) 白水社。
7. Bonazzi Andrea『カントの理性信仰と比較宗教哲学——諸宗教の対話への哲学的基礎付け』近代文藝社。
8. ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』平凡社。
9. W. イエシュケ『ヘーゲルの宗教哲学』早稲田大学出版部。
10. 加藤尚武編『ヘーゲルを学ぶ人のために』世界思想社。
11. 権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』岩波書店。
12. シュネーデルバッハ『ヘーゲル以後の歴史哲学』法政大学出版局。
13. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年。
14. K.レーヴィット『ヘーベルからニーチェへ I、II』岩波書店、1952年。